

# 『一心千里』

## 走って行けば、 見えてくる



永田隆一

第29回

『阿』という字は、梵語（古代インド語）で、12母音の1番目の字であり、すべての言語と文字は、この『阿』の音をもとに生じるとされております。

おり、仁和寺の僧侶が、行き倒れた人の額に『阿』字を書いて、成仏できるようにとされたようであり、この『阿』の音をもとに生じるとされております。

と、心配事が増えてしまふ。貧しいと、嘆くことが増えてしまふ。他人を頼ると、その人の言つとおりには動かなければなら

今、歩いていた人が、ばたつと行き倒れる。そういう、死というものがある身近な社会。きれいな物を着た婦人が、物乞い

3・11の地震と津波、さらに、原発事故。台風の直撃。ありえない円高。ヨーロッパに端を発する、大きな不景気が近づいている足音。結果として、

数年は、大丈夫です。国民・企業の預貯金が、国債を買い支えることが出来るからです。しかし、預金率の低下、預金の減少が始まります。そうすると、日本の国債を、外国に購入してもらわなければならなくなり、円安と、金利上昇によるインフレへと、大きな変化が始まります。借金体質の日本国のデフォルト・リ

ここに、大きなリスクを感じます。数年前から、レアアースの品不足により、日本企業は大きな試練を迎えました。しかし、『半導体の調達不調』というリスクを、どなたも唱えません。最近、円高であるために、本リスクは顕在化しておりませんが、数年後円安傾向になり、海外の半導体メーカーが、『申し訳ございません。日本へ売る半導体は、ございません』となった場合、日本の産業界のダメージは、計り知れないものとなります。筆者は、国内半導体工場が生き残るために、フ

# せつなさと無常の方丈記から、 日本国のリスクを考える

1180年を数年経

て、まったく雨が降らない、養和の飢饉という悲惨な時代があったそうです。日本3大随筆のひとつ『方丈記』に、鴨長明が書いております。

養和の時代に、2年間、干ばつと、大風、洪水が続き、都にはまったく食料が入ってこなくなり、京都では、一条から南、九条から北の間、京極から西、朱雀から東の地区に行き倒れた人を数えたら、4万2300人余り

方丈記は、鴨長明が実際に体験した、5つの災害を描写して、この世の無常と、はかなさを表現しております。安元の大火 治承の辻風 福原への遷都 養和の飢饉 元暦の大地震

なくなる。人の世話をすると、愛情の注ぎかたに苦勞して、疲れてしまふ。世間の習慣に従わないと、気が狂っていると思われる。気が狂っているとみられてしまふ。いったい何処に住んで、どんな仕事に就けば、こころ安らかでいられるのだろうかかと、心情を吐露しております。

をしている、無常に囲まれた社会というものは、現代人では感覚的に想像することが出来るように思いますが、きっと想像をはるかに超えているのでありましよう。

205万人という、戦後最大の生活保護受給者数。歴史は、繰り返すと言います。愚者は体験に学び、賢者は歴史に学ぶと言いますが、どうも空しく感じてしまいます。

また、『半導体は、産業の米』という言葉が、かつてありました。現在、利益という観点から、日本国内での半導体製造をファブライト化して、海外からの半導体調達へ、大きく舵をきり始めております。

閉鎖された、半導体工場に『阿』の字を書いていく時代を、乗り越える。本気で考えなくてはなりません。

(毎月掲載)